

5G時代のビジネス創出

2020年となり、グローバル市場でも多くのキャリアが第5世代移動通信システム（5G）サービスを開始しました。現在すでに30を超える国、80前後の5Gネットワークが稼働しているとされ、これまでにないこうした導入スピードが5Gに対する期待の表れとみて取れます。5Gは標準化の段階から“Enabling Technology”とも言われ、マスマーケットだけでなくB2B2X（Business to Business to X）のようなビジネス領域への伸長を企図されたものと理解されています。メディアでよく喧伝される無線区間の低遅延、大容量伝送だけでなく、ネットワークも仮想化をさらに意識し、かつエッジコンピューティング*1を許容することなど、これまでのモバイルネットワークとは一線を画す設計思想であることを強く感じます。標準化での寄書活動を通して、キャリアや通信機器ベンダだけでなくクラウド事業者といった新しいプレーヤの意向も当然反映されています。5G時代のビジネスを担う立場としては、5Gを技術的な実装面だけで理解するのではなく、こうした背景を理解し、競争力のあるビジネスを迅速に提供していかなければなりません。これはこの後に続く5Gの高度化や、第6世代移動通信システム（6G）でもさらに重要なポイントになることでしょう。

これまでのモバイルネットワークの世代移行（マイグレーション）でもそうでしたが、「通信基盤の技術的な進化」「そのポテンシャルを活かす関連技術とそれを保有するパートナーとの連携」「そうして生み出される新しいサービスが市場の嗜好から逸脱したものにならないよう、受益者である企業、個人のお客様に自然にご満足いただけるサービスの提供」という3つの要素がビジネスの要諦となります。ドコモでは、5Gに至るこれまでも基礎検討から実用化開発まで第一線で貢献をしていますし、いち早くドコモ5Gオープンパートナープログラムの組成を図り、多くのパートナー企業とサービス開発を進めてきました。3月25日の商用開始と同時に発表した22のソリューションは、5Gのポテンシャルを活かす高精度画像処理、AI分析、xRなどの要素技術との融合であり、導入期の5Gビジネスの特徴を強く示しています。ビジネスチームとしては、これを産業別にご提案、業界ごとにもきめ細かくエンゲージし、ご利用いただくお客様に新しい価値を体感いただき、ご満足いただける商品開発を行ってまいります。

一方で、通信を取り巻くICTの事業環境は、さらに高度な領域に及びつつあります。前述したクラウド事業者



5G・IoTビジネス部 部長
つぼや ひさかず
坪谷 寿一

の事業拡大はこれまでの通信基盤の進化と歩調を合わせたものであり、5G時代のビジネス環境もサイバー・フィジカル融合、DX（Digital transformation）*2などのキーワードとともに多様な競争環境にシフトしていくと思われれます。ドコモの法人事業でも、こうした変化に対し、3G/LTEで伸ばしてきたIoTビジネスとその過程で生み出されてきた構造化データによるDX、さらに5Gで大きく成長が期待される高精度画像・動画伝送、それにより生成される非構造化データも加えた統合的なDXをパートナー企業とともに進めていきます。

最後に、5Gの商用開始が新型コロナウイルスの感染拡大と機を同じくしたことは、後年さまざまな形で論じられるかもしれません。新型コロナウイルスの感染拡大は、私たちの想定を上回る社会課題を突きつけ、「リモート」や「分散」という新たな生活様式を一気に生み出そうとしています。これまでのマイグレーションでは、関連技術の登場と新ビジネスの創出には幾分かタイムラグがありましたが、今回はこれまでとは異なり大変速いスピードで新しいサービスが生み出されていくと強く感じます。私もこれまで以上に能動的な意思をもち、適時的確にビジネスを提案するため、さらに気を引き締めて臨む所存です。

*1 エッジコンピューティング：ユーザーの近くにエッジサーバを分散させ、距離を短縮することで通信遅延を短縮する技術。

*2 DX：ITの浸透が人々の生活をあらゆる面で良い方向に変化させること。